

上流花街の繁栄を伝える。



城下町



近世・藍染商の町家を再生した箱本館「紺屋」。藍染体験ができる。

随所に意匠が見られる。



石仏を転用した「逆さ地藏」。



郡山城内で病没した秀長を記する「大納言塚」。温厚かつ有能で、葬儀には「野も山も崩れんばかり」の人が集ったと古書が伝える。



城跡

近年、郡山城跡に復元された追手向櫓と追手門。



北部は奈良市と隣接し、平城京の羅城門跡も市域にある。戦国時代、織田信長の傘下・筒井順慶が郡山城を築き、豊臣秀吉の弟・秀長が城を拡大して城下町を整備した。近世には柳澤吉里が甲斐から入り、金魚養殖が始まったと伝えられる。まちづくり・建設の視点で城郭と城下町を歩いた。



城跡・金魚と「箱本十三町」

大和郡山



豊臣時代、大和の政治・経済を支配

大和で最も大規模な城郭、郡山城。内堀・中堀・外堀、三重の堀を備えた「惣堀」の構えを持つていた。築城・まちづくりの立て役者は、百万石の太守・豊臣秀長。大坂城の防衛を目的とし、大和の支配を確立した。具体的には、刀狩り・検地を行い、多武峰や興福寺などの寺社権力を分散し、南都の商人に働きかけて、郡山城下を大和の政治・経済の中心とした。

郡山城は丘陵の裾野に建つ



金魚資料室、金魚水族館などが見学でき、金魚の購入もできる「郡山金魚資料館」(やまと錦魚園)。年間300万尾を卸し、素人の金魚品評会や競り市も主催する。



嶋田輝也代表

金魚



葉が金魚の形をした金魚葉椿。当地の観光スポット数カ所に植わる。



マンホールの蓋も金魚模様



金魚のキャラクターが乗った郵便ポスト

平山城だが、天守台に登れば東は平城京跡、南都の寺社、三輪山、西は二上山・金剛葛城山系が一望のもと。城下町へ下りると、計画的に造られた道路網・町割を、今も自らの足でたどることができる。秀長は、各地から有力な商工業者を集めて税を免除し、自治権・独占権を与えた。営業上の特許状を朱印箱に納め、13の町がひと月ごとに持ち回りする仕組みで、「箱本十三町」と呼ばれる。魚塩町・材木町・紺屋町など同業者を表す町名や、奈良町・堺町・今井町といった出身地を示す町名が現在も残る。

近世に入り、郡山城は水野家・松平家・本多家・柳澤家の居城となる。柳澤吉里が享保9年(1724年)に伝えたという金魚の養殖は、幕末・維新後に藩士や農家の副業として広がった。水質・水利に恵まれた溜池が多く、高度経済成長期には海外輸出も進んだ。都市化に伴い生産数は減少したものの、年間約4300万尾を販売する。海のない奈良盆地だが、市役所内に農業水産課があるのはその由縁だ。城跡・金魚は観光資源ともなり、多様な地域振興事業に活かされている。



藍染などの和製品を展示。秀長の治世以降、江戸時代を通し奈良盆地の藍染を紺屋町が独占した。



ブラウン管TVを水槽にした金魚鉢。

「金魚の泳ぐ城下町」を世界へ発信

当市では郡山城跡の追手門や櫓を復元し、数年前に天守台の整備も完了しました。豊臣秀長が談山神社から移し、柳澤吉里が甲府から移植したという城跡の桜は、近世から藩士や町民を楽しませていました。今も桜シーズンに開催する「城まつり」が人気を博しています。名産の金魚は、まちの至るところでオブジェ・デザイン化され、観光に「役買」ついています。「全国金魚すくい選手権大会」は、金魚すくいを競技にしようという発想から生まれ、1995年から開催。参加者は第1回の696人から年々増え、現在は1300人程度が参加されています。2025年より大会動画のYouTube配信を始めました。



例年、大賑わいの「全国金魚すくい選手権大会」



大和郡山市役所



大和郡山市 産業振興部次長 兼 地域振興課長 熊木 俊行さん(左)と、地域振興課 観光戦略室長 井岡 朋美さん(右)